

各農業改良普及センター所長様
各農業協同組合長（営農担当者）様
各病害虫調査協力員様
各農業関係機関長・団体長様

京都府病害虫防除所長
（公 印 省 略）

病害虫発生予察情報について

下記のとおり発表しましたので送付します。

病害虫発生予報第7号（9月）

予報の概要

作物名	病害虫名	予想発生量 <平年比(前年比)>	作物名	病害虫名	予想発生量 <平年比(前年比)>
イネ	穂いもち	少(少)	チャ	チャノホソガ	やや少(並) 発生時期 山城:並 丹波:早い
	紋枯病	やや少(やや多)		カンザワハダニ	山城:多(多) 丹波:並(やや少)
	トビイロウンカ	並(並)		チャノミト ^リ ヒメヨコハ ^イ	山城:やや多(多) 丹波:やや少(並)
	コブノメイガ	やや少(少)		チャノキイロアザ ^ミ ウマ	山城:多(多) 丹波:やや少(やや少)
	斑点米カメムシ類	並~ <u>やや多</u>		クワシロカイカ ^ラ ムシ	山城:やや多(やや多) 丹波:並(やや少)
ダイズ	ハスモンヨトウ	やや少(やや少)	野菜	うどんこ病(果菜類)	やや少(少)
	カメムシ類	<u>やや多</u> (多)		疫病・褐色腐敗病(キュウリ等)	並(並)
	ハダニ類	やや少(少)		褐斑病(キュウリ)	並(やや少)
アズキ	ハスモンヨトウ	やや少(やや少)		炭そ病(キュウリ)	並
	ハダニ類	並(並)	ハダニ類	並(並)	
果樹	ナシ黒斑病	並(やや多)	アブラムシ類	<u>やや多</u> (やや多)	
	ナシ黒星病	<u>やや多</u> (やや少)	(ア ^ラ ヲ科等)	並~ <u>やや多</u> (並)	
	ブドウべと病	少(並)	アザミウマ類	(果菜類)	
	カキうどんこ病	やや少(並)	ネギアザミウマ	<u>やや多</u> (多)	
	カキ炭そ病	並(並)	ネギ ^ハ モク ^リ ハ ^イ	並(並)	
	カメムシ類	並(やや多)	ハモク ^リ ハ ^イ 類	並(並)	
	ハダニ類	<u>多</u> (並)	(果菜类等)		
チャ	炭そ病	山城:並(並) 丹波:少(少)	コナガ	やや少(並)	
	もち病	並(並)	シロヒ ^メ イカ ^カ	<u>やや多</u>	
	チャノコカクモンハマキ	並(山城:並) (丹波:やや少) 発生時期:山城:並 丹波:早い	ハスモンヨトウ	やや少(やや少)	

用語の定義

1 半旬のとり方

	第1半旬	第2半旬	第3半旬	第4半旬	第5半旬	第6半旬
各月の	1～5	6～10	11～15	16～20	21～25	26～最終
	日	日	日	日	日	日

2 発生量 - - - 病害虫の発生程度と広がり両面を加味したものをいう。

3 発生及び被害等の程度 - - - 程度は甚、多、中、少、無の5段階に分ける。
それぞれの病害虫の基準については各作物の項参照。

4 平年値 - - - 原則として過去10か年の平均とする。
データが10年に満たない場合は例年値とする。

5 平年値との比較

1) 時期

平年並	平年値を中心として前後2日以内
やや早い	平年値より3～5日早い
やや遅い	平年値より3～5日遅い
早い	平年値より6日以上早い
遅い	平年値より6日以上遅い

2) 量(発生量、発生面積等)

平年並	平年値並の発生で10年間に4回は発生する程度の普通の量
やや多い	「平年並」より発生が多く、10年間に2回程度の頻度で発生する量
やや少ない	「平年並」より発生が少なく、10年間に2回程度の頻度で発生する量
多い	「やや多い」より多く、10年間に1回程度しか発生しない量
少ない	「やや少ない」より少なく、10年間に1回程度しか発生しない量

- 農薬の使用にあたっては使用基準を遵守すること -

予報本文の見方

(例)

3 チャノコカクモンハマキ

予報内容 発生量：山城 平年比少ない（前年比少ない）
丹波 平年比やや多い（前年比やや多い）
発生時期：第3世代幼虫ふ化期8月第3～4半旬（平年並）

- ・「予報内容」は、今後の病害虫発生状況や発生時期の予測を平年比として示しています。
- ・平年比の考え方は、「I 用語の定義」の「5 平年値との比較」を参照してください。
- ・（ ）内の前年比は前年の実際の発生量（時期）との比較を示しています。
- ・必要に応じて地域別に示しています。

予報の根拠

- (1) 7月中旬現在、第2世代の発生量は山城で平年比少なく(-)、丹波でやや多い(+).
- (2) 第1世代成虫のフェロモントラップへの誘殺盛期は平年並であった。

- ・「予報の根拠」は、巡回調査の結果、天候、フェロモントラップへの誘殺状況、指導機関からの情報等、「予報内容」で示した発生量や発生時期の根拠となった事項を示しています。
- ・文中の(-)、(+)は、発生量の予想に影響を及ぼすと考えられるもので、(-)の場合は発生量が少なくなる要因、(+)は発生量は多くなる要因を示します。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 通常、4回世代を繰り返す、第2世代成虫が7月下旬～8月上旬に発生し産卵する。
- (2) ふ化した幼虫は成長すると、葉を綴って食害するようになり、薬剤がかかりにくくなるので、ふ化直後の若齢幼虫期の防除が効果的である。

- ・「発生生態及び防除上注意すべき事項」は、当該病害虫の生態、薬剤防除や耕種的防除上の留意事項、要防除水準等を示しています。

近畿地方 1 か月予報

(8 月 1 6 日から 9 月 1 5 日までの天候見通し)

平成 2 0 年 8 月 1 5 日
大阪管区気象台発表

< 予想される向こう 1 か月の天候 >

向こう 1 か月の出現の可能性が最も大きい天候と特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

天気は、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

向こう 1 か月の気温は、高い確率 5 0 % です。

週別の気温は、1 週目と 2 週目は平年並または高い確率ともに 4 0 %、3 ~ 4 週目は高い確率 5 0 % です。

< 向こう 1 か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率 (%) >

	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気 温	1 0	4 0	5 0
降 水 量	3 0	4 0	3 0
日 照 時 間	3 0	4 0	3 0

注意

大阪管区気象台から発表される天候の 1 か月予報の表現が、平成 1 8 年 9 月 2 5 日以降変わりました。

これまで病虫害発生予察の一つ根拠としていた天候の 1 か月予報の表現と整合性をとるため、病虫害防除所では上記の天候の 1 か月予報の表現を「**向こう 1 か月の気温は高く、降水量及び日照時間は平年並と予想されている。**」としました。

お知らせ

残留農薬基準等のポジティブリスト制度導入に伴う農薬適正使用の徹底について

平成 1 8 年 5 月 2 9 日より食品衛生法に基づくポジティブリスト制度が導入され、いままで残留基準値が定められていなかった農薬成分と農作物の組み合わせにも、新たに国際基準等を参考として暫定的な基準値が設定されるとともに、参考となる基準がない場合には一律基準 (人の健康を損なうおそれのない量 ; 0.01 ppm) が適用され、基準値を超えて農薬が残留する食品 (農産物等) の流通が禁止となりました。このため、農薬の適正使用はもちろんのこと、周りの圃場の作物へ農薬が飛散 (ドリフト) しないように十分注意してください。

また、水田において農薬を使用するときは農薬のラベルに記載されている止水に関する注意事項等を確認するとともに、止水期間を 1 週間程度とし、止水期間の農薬の流出を防止するために必要な水管理や畦畔整備等の措置を講じるよう努めてください。

予報本文

イネ

1 穂いもち（中晩生水稲）

予報内容 発生量：平年比少ない（前年比少ない）

予報の根拠

（１）８月中旬現在、葉いもちの発生量は平年比やや少ない（－）。

（２）９月の気温は高く（－）、降水量及び日照時間は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

（１）上位葉へ進展した葉いもちの病斑は、穂いもちの主な伝染源となる。

（２）穂ばらみから出穂後約３週間に、日照時間が少なく多雨多湿であると発生が多くなる。

（３）発病に要する温度範囲は、 $14 \sim 30$ 、適温は 25 である。

（４）出穂後曇雨天が続く場合には、傾穂期前後にも防除を行う。特に枝梗は遅くまで菌の侵入を受けるので、枝梗いもちの発生に注意する。

（５）ヒノヒカリ、祝等、発病しやすい品種では注意する。

（６）平成 16 、 17 年度の調査で**MBI-D剤耐性いもち病菌**が一部地域で確認されたので、薬剤の選定にあたっては注意する。

MBI-D剤：カルプロパミド（商品名：ウィンなど）、ジクロシメット（商品名：デラウスなど）、フェノキサニル（商品名：アチーブなど）

2 紋枯病（中晩生水稲）

予報内容 発生量：平年比やや少ない（前年比やや多い）

予報の根拠

（１）８月中旬現在、発生量は平年比やや少ない（－）。

（２）９月の気温は高く（＋）、降水量及び日照時間は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

（１）高温多湿で発病が助長され、病斑が上位へ進展すると被害が大きくなる。

（２）近年多発傾向にある。昨年多発したほ場では、浅水管理に心掛け上位葉鞘への進展を抑える。

（３）ほ場内をよく見回り、病斑が上位へ進展している株が多い場合は使用基準を考慮し薬剤の散布を行う。

3 トビイロウンカ

予報内容 発生量：平年並（前年並）

予報の根拠

（１）８月第２半旬現在、予察灯での誘殺を認めていない。

（２）８月中旬現在、ほ場での発生を認めていない（平年並）。

発生生態及び防除上注意すべき事項

（１）多発すると坪枯れ等の被害を起こす。

（２） $8 \sim 9$ 月の気温が高いと増殖に好適である。

（３）低湿田、通風不良田、多肥田等では発生しやすいので注意する。

4 コブノメイガ（晩生水稲）

予報内容 発生量：平年比やや少ない（前年比少ない）

予報の根拠

（１）８月中旬現在の発生量は、山城で平年比やや少ない（－）。

発生生態及び防除上注意すべき事項

（１）幼虫が葉を筒状に綴って食害し被害痕が白く目立つが、収量・品質に影響が
でるのは上位葉の被害が多い場合のみである。少し食害が目立つ程度であれば、
収量・品質にはほとんど影響はない。

（２）晩植・多肥田やこれらの水口付近、生育の遅いイネには成虫が集中的に飛
来するので注意する。

5 斑点米カメムシ類（中晩生水稲）

予報内容 発生量：平年並～やや多い

予報の根拠

（１）８月中旬現在、本田での発生量は平年比やや多い（＋）。

（２）８月中旬現在、畦畔雑草での発生量は平年並。

発生生態及び防除上注意すべき事項

（１）稲穂を吸汁加害し、斑点米の原因となるカメムシ類には多くの種類が
いるが、近年、カスミカメムシ類による被害が増加している。

（２）近年、多発し問題となっている地帯では、穂揃期と傾穂期の防除（共同、
一斉）が有効である。

発生予察注意報第１号を参照のこと。

黒大豆

1 ハスモンヨトウ

予報内容 発生量：平年比やや少ない（前年比やや少ない）

予報の根拠

（１）８月中旬現在、発生を認めていない（平年並）。

（２）８月第２半旬現在、フェロモントラップでの誘殺数は平年比やや少ない
（－）。

発生生態及び防除上注意すべき事項

（１）早期発見に努め、幼虫分散前の白変葉を取り除く。

（２）齢が進んだ幼虫は周囲に分散し、かつ、薬剤の効果が著しく低下するので、
若齢幼虫期の防除が重要である。

2 吸実性カメムシ類

予報内容 発生量：平年比やや多い（前年比多い）

予報の根拠

（１）８月中旬現在、発生量は平年比やや多い（＋）。

（２）８月第２半旬現在、予察灯での誘殺数は平年比やや多い（＋）。

発生生態及び防除上注意すべき事項

（１）吸実性カメムシ類にはアオクサカメムシ、ホソヘリカメムシ、イチモンジ
カメムシ等がいる。

- (2) 莢がつきはじめる頃から飛来し増殖、黄変する時期まで加害を続ける。
- (3) ほ場周辺に雑草地などカメムシ類の発生しやすい場所があると、被害を受けやすいので注意する。
- (4) 薬剤散布は若莢期から10日間隔で2～3回実施する。

3 ハダニ類

予報内容 発生量：平年比やや少ない（前年比少ない）

予報の根拠

- (1) 8月中旬現在、発生を認めていない（平年比少ない）（ - ）。
- (2) 9月の気温は高く（ + ）、降水量は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 繁殖が早く、高密度になってからでは防除効果が劣る。
- (2) 晴天が続くと多発しやすいので注意する。
- (3) 合成ピレスロイド系薬剤を連用すると、ハダニ類が多発する場合がありますので注意する。

4 子実害虫類（サヤムシガ類など）

被害を確認してからでは、手遅れとなることが多いので注意する。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) カメムシ類との同時防除を考慮する。

アズキ

1 ハスモンヨトウ

予報内容 発生量：平年比やや少ない（前年比やや少ない）

予報の根拠

- (1) 8月中旬現在、発生を認めていない（平年比やや少ない）（ - ）。
- (2) 8月第2半旬現在、フェロモントラップでの誘殺数は平年比やや少ない（ - ）。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 黒大豆の病害虫の項参照のこと。

2 ハダニ類

予報内容 発生量：平年並（前年並）

予報の根拠

- (1) 8月中旬現在、発生を認めていない（平年並）。
- (2) 9月の気温は高く（ + ）、降水量は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 黒大豆の病害虫の項参照のこと。

3 子実害虫類（アズキノメイガ、マメノメイガ、サヤムシガ類など）

被害を確認してからでは、手遅れとなることが多いので開花始めから十分注意する。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 幼虫が茎や莢内に食入すると、防除効果が劣るので、幼虫ふ化時期～食入開始時期の防除が重要である。
- (2) 開花初めから10日間で2～3回の防除が有効である。

果樹

1 ナシ 黒斑病

予報内容 発生量：平年並（前年比やや多い）

予報の根拠

- (1) 8月中旬現在、発生量は平年並。
- (2) 9月の気温は高く、降水量及び日照時間は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 常発園では、収穫後の防除に留意する。

2 ナシ 黒星病

予報内容 発生量：平年比やや多い（前年比やや少ない）

予報の根拠

- (1) 8月中旬現在、発生量は平年比多い（+）。
- (2) 9月の気温は高く（-）、降水量及び日照時間は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 夏から秋に、徒長枝に発病しやすい。
- (2) 収穫後の防除に留意する。

3 ブドウ べと病

予報内容 発生量：平年比少ない（前年並）

予報の根拠

- (1) 8月中旬現在、発生量は平年比少ない（-）。
- (2) 9月の気温は高く（-）、降水量及び日照時間は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 雨が多く、気温が低めに経過すると多発しやすい。
- (2) ハウス栽培では、過繁茂を避け通風をよくする。

4 カキ うどんこ病

予報内容 発生量：平年比やや少ない（前年並）

予報の根拠

- (1) 8月中旬現在、発生量は平年比やや少ない（-）。
- (2) 9月の気温は高く、降水量及び日照時間は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 9月に病原菌の活動が、再び活発になる。

5 カキ 炭そ病

予報内容 発生量：平年並（前年並）

予報の根拠

- (1) 8 月中旬現在、発生を認めていない(平年並)。
- (2) 9 月の気温は高く、降水量及び日照時間は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 9 ~ 1 0 月に雨が多いと、果実の被害が増える。

6 カメムシ類(果樹全般)

予報内容 発生量：平年並(前年比やや多い)

予報の根拠

- (1) 8 月第 2 半旬現在、予察灯での誘殺数は平年並。
- (2) 8 月第 2 半旬現在、フェロモントラップでの誘殺数は平年並。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 果実被害は園により大きく異なる。特に、山林等の隣接園では注意する。
- (2) 収穫が近いものも多いため、農薬の使用に当たっては使用基準を厳守する。
- (3) 合成ピレスロイド系薬剤を連用すると、カイガラムシ類やハダニ類の発生が増えることがある。

7 ハダニ類(ナシ、カンキツ、ブドウ)

予報内容 発生量：平年比多い(前年並)

予報の根拠

- (1) 8 月中旬現在、発生量はナシで平年比多く(+)、カンキツで平年比やや多い(+)。
- (2) 9 月の気温は高く(+)、降水量は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 合成ピレスロイド系薬剤を連用すると、ハダニ類が多発する場合がありますので注意する。

チャ

1 炭そ病

予報内容 発生量：山城 平年並(前年並)
丹波 平年比少ない(前年比少ない)

予報の根拠

- (1) 8 月中旬現在、発生量は山城で平年並、丹波で平年比少ない(-)。
- (2) 9 月の気温は高く、降水量及び日照時間は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 本病が感染するのは新葉に限られ、新芽生育期に降雨が続くと発生が多くなる。
- (2) 秋に残った罹病葉は、翌春の伝染源となる。

2 もち病

予報内容 発生量：平年並(前年並)

予報の根拠

- (1) 8 月中旬現在、発生を認めていない(平年並)。
- (2) 9 月の気温は高く、降水量及び日照時間は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 病斑上に形成された担子胞子が風雨で飛散し、新芽に感染する。
- (2) 山間地で発生が多い。
- (3) 病原菌は、芽に付着して越冬し、翌春の伝染源となる。

3 チャノコカクモンハマキ

予報内容 発生量：平年並（山城：前年並）
（丹波：前年比やや少ない）
発生時期：第4世代幼虫ふ化期
山城 10月第1半旬～10月第3半旬（平年並）
丹波 9月第5半旬～10月第1半旬（平年比早い）

予報の根拠

- (1) 8月中旬現在、発生量は平年並。
- (2) フェロモントラップへの誘殺盛期は宇治で平年並、綾部で平年比早い。
- (3) 9月の気温は高く、降水量は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 通常、第4世代幼虫が10月上旬～10月中旬に発生し、綴った葉の中で越冬して翌春の発生源となる。
- (2) ふ化した幼虫は成長すると、葉を綴って食害するようになり、薬剤がかかりにくくなるので、ふ化直後の若齢幼虫期の防除が効果的である。

4 チャノホソガ

予報内容 発生量：平年比やや少ない（前年並）
発生時期：第5世代幼虫ふ化期
山城 9月第5半旬～10月第1半旬（平年並）
丹波 9月第3半旬～9月第5半旬（平年比早い）

予報の根拠

- (1) 8月中旬現在、第4世代幼虫の発生量は、平年比やや少ない（ - ）。
- (2) フェロモントラップへの誘殺盛期は宇治で平年並、綾部で平年比早い。
- (3) 9月の気温は高く、降水量は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 通常、5回世代を繰り返し、9月中下旬に第4世代成虫が発生し産卵する。
- (2) 卵は3～7日でふ化し、新芽を加害する。
- (3) 第5世代幼虫ふ化期が、最終の防除時期にあたるので、多発園では防除を徹底する。

5 カンザワハダニ

予報内容 発生量：山城 平年比多い（前年比多い）
丹波 平年並（前年比やや少ない）

予報の根拠

- (1) 8月中旬現在、発生量は山城で平年比やや多く（ + ）、丹波で平年比やや少ない（ - ）。
- (2) 9月の気温は高く（ + ）、降水量は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 繁殖力は10～30の範囲で高温の時ほど高いが、降雨により増殖が抑制される。
- (2) 通常、盛夏に発生が減少するが、秋になると再び増加することがある。

6 チャノミドリヒメヨコバイ

予報内容 発生量：山城 平年比やや多い（前年比多い）
丹波 平年比やや少ない（前年並）
発生時期：秋芽伸育期

予報の根拠

- (1) 8月中旬現在、発生量は山城で平年並、丹波で平年比少ない（-）。
- (2) 9月の気温は高く（+）、降水量は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 主に新梢を加害し、新芽の被害症状は黄化、萎縮、葉先の褐変、黒変等である。
- (2) 少雨で乾燥した条件で増加しやすい。

7 チャノキイロアザミウマ

予報内容 発生量：山城 平年比多い（前年比多い）
丹波 平年比やや少ない（前年比やや少ない）
発生時期：秋芽伸育期

予報の根拠

- (1) 8月中旬現在、発生量は山城で平年比やや多く（+）、丹波で平年比少ない（-）。
- (2) 9月の気温は高く（+）、降水量は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 主に二番茶以後に増加し、夏秋芽を吸汁加害する。
- (2) 多雨により発生は減少するが、生息密度が高いと多少の雨では影響が小さい。
- (3) 発生密度が高いと1回の防除では効果が劣るので、5～7日おきに2回の防除が必要である。

8 クワシロカイガラムシ

予報内容 発生量：山城 平年比やや多い（前年比やや多い）
丹波 平年並（前年比やや少ない）

予報の根拠

- (1) 8月中旬現在、発生量は山城で平年比やや多く（+）、丹波で平年並。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 年間3回（一部山間部では2回）発生する。
- (2) 通常、防除適期である第3世代幼虫ふ化期は、9月下旬から10月上旬である。
- (3) 多発している園も認められるので、園を見回り発生の多い園では防除する。

9 ミカントゲコナジラミ

ミカントゲコナジラミは、平成16年8月に国内で初めて、京都府においてチャへの寄生が確認され、分布が拡大している。8月中旬の巡回調査では、山城地域の多くの園で発生を確認し多発園も認めた。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 成虫の発生
年に4回発生する。

(2) 対策

農薬による防除適期は若齢幼虫期である。成虫発生期の散布では密度抑制効果が不十分であるため、成虫の飛翔が落ちついた頃を見計らって薬剤散布を行う。

(3) 登録のある薬剤

- ・ハチハチ乳剤 (1,000倍、摘採14日前まで / 1回)
- ・アブロード水和剤 (1,000倍、摘採14日前まで / 2回以内)
- ・アブロードエースフロアブル (1,000倍、摘採14日前まで / 1回)
- ・ダニゲッターフロアブル (2,000倍、摘採7日前まで / 1回)

野菜

1 うどんこ病 (果菜類)

予報内容 発生量：平年比やや少ない (前年比少ない)

予報の根拠

(1) 8月中旬現在、発生量は平年比やや少ない (-)。

(2) 9月の気温は高く (+)、降水量及び日照時間は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

(1) 窒素肥料の過用を避け、茎葉が繁茂し過ぎないようにする。

2 疫病・褐色腐敗病 (キュウリ、ナス、トウガラシ)

予報内容 発生量：平年並 (前年並)

予報の根拠

(1) 8月中旬現在、発生を認めていない (平年並)。

(2) 9月の気温は高く、降水量及び日照時間は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

(1) 水によりまん延することが多く、多湿条件下で発生が多い。

(2) ほ場の排水に努める。特に降雨時の地表水を速やかに排水する。

(3) マルチを行って、はね上げ伝染を防ぐ。

3 褐斑病 (キュウリ)

予報内容 発生量：平年並 (前年比やや少ない)

予報の根拠

(1) 8月中旬現在、発生量は平年並。

(2) 9月の気温は高く、降水量及び日照時間は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

(1) 褐斑病の発病適温は25～30 である。

(2) 一度発生したほ場では、毎年発生がみられることが多い。

4 炭そ病 (キュウリ)

予報内容 発生量：平年並

予報の根拠

(1) 8月中旬現在、巡回調査では発生を認めていない (平年並)。

(2) 普及センター等からの報告によると、発生の目立つほ場がある。

(3) 9月の気温は高く、降水量及び日照時間は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

(1) 露地栽培では、秋雨の続く頃に多発しやすい。

(2) 気温が高く降雨があると急激にまん延するので、早めの防除を心がける。

5 ハダニ類(チャノホコリダニを含む)

予報内容 発生量：平年並(前年並)

予報の根拠

(1) 8月中旬現在、発生を認めていない(平年比やや少ない)(-)。

(2) 9月の気温は高く(+)、降水量は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

(1) 薬剤が葉裏や生長点にかかるよう丁寧に散布する。

(2) ハダニ類は薬剤に対する抵抗性が生じやすいので注意する。

(3) 雨よけ栽培では発生しやすいので十分注意し、発生初期の防除に留意する。

6 アブラムシ類(アブラナ科、キュウリ、ナス、ハウレンソウなど)

予報内容 発生量：平年比やや多い(前年比やや多い)

予報の根拠

(1) 8月中旬現在、発生量は平年比やや多い(+)。

(2) 8月第3半旬現在、黄色水盤への飛来数は例年並。

(2) 9月の気温は高く(+)、降水量は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

(1) アブラムシ類には直接吸汁加害するだけでなく、モザイク病を媒介するものもいる。

(2) 通常、無翅虫で集団加害する。

(3) 密度が高まると有翅虫が現れて分散・飛来し、発生が拡大する。

(4) 高温、乾燥が続くと発生が多くなる。

7 アザミウマ類(果菜類)

予報内容 発生量：平年並～やや多い(前年並)

予報の根拠

(1) 8月中旬現在、発生量は平年並。

(2) 9月の気温は高く(+)、降水量は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

(1) アザミウマ類には直接加害するだけでなく、ウイルス病を媒介するものもいる。

(2) 雨よけ栽培では発生が多くなるので注意する。

8 ネギアザミウマ

予報内容 発生量：平年比やや多い(前年比やや多い)

予報の根拠

(1) 8月中旬現在、発生量は平年並。

(2) 9月の気温は高く(+)、降水量は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

(1) 年間、10世代以上くり返し、葉の表層を食害、かすり状の食害痕を残す。

(2) 葉鞘分岐部や葉折れの内側に多く寄生する。

9 ネギハモグリバエ

予報内容 発生量：平年並（前年並）

予報の根拠

- （１）８月中旬現在、発生量は平年比やや少ない（－）。
- （２）９月の気温は高く（＋）、降水量は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （１）幼虫が葉肉部分を加害し、白い筋状の食害痕を残す。

10 ハモグリバエ類（果菜類等）

予報内容 発生量：平年並（前年並）

予報の根拠

- （１）８月中旬現在、発生量は平年並。
- （２）９月の気温は高く（＋）、降水量は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （１）トマトハモグリバエは、８月以降多発する傾向がある。
- （２）シュンギク、コマツナ等軟弱野菜は、被覆資材を用いた物理的防除に努める。
- （３）幼虫は葉の中に潜り込み食害するが、その期間は３日程度と非常に短いので、薬剤を散布する場合は、発生確認後、速やかに行い防除時期を逸しないようにする。

11 コナガ（アブラナ科）

予報内容 発生量：平年比やや少ない（前年並）

予報の根拠

- （１）８月第２半旬現在、予察灯での誘殺数は平年並。
- （２）８月第２半旬現在、フェロモントラップでの誘殺数は亀岡で平年比少なく（－）、京丹後でやや少ない（－）。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （１）年間の発生回数が多く、各発育段階（卵、幼虫、蛹、成虫）が混在する。
- （２）雨が多いと発生が抑制される傾向がある。
- （３）被覆資材などを利用し、物理的防除に努める。

12 シロオビノメイガ（ハウレンソウ）

予報内容 発生量：平年比やや多い

予報の根拠

- （１）８月第２半旬現在、予察灯での誘殺数は平年比やや多い（＋）。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （１）晩夏以降に多発するようになる。
- （２）早期発見に努め、若齢幼虫期の防除に留意する。
- （３）雨よけハウスでは多発しやすいので注意する。

13 ハスモンヨトウ（野菜全般）

予報内容 発生量：平年比やや少ない（前年比やや少ない）

予報の根拠

- (1) 8 月第 3 半旬現在、フェロモントラップへの誘殺数は平年比やや少ない(-)。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 早期発見に努める。ダイズやサトイモなどハスモンヨトウの初発の確認しやすい寄生作物上の発生状況を観察する。
- (2) 齢が進んだ幼虫は周囲に分散し、かつ薬剤の効果が著しく低下するので、若齢幼虫期の防除が重要である。

1 4 軟腐病(キャベツ、ハクサイ、カブなど)

発生すると大きな被害になるので予防防除に努める。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) ほ場の排水に努め、雨水が停滞しないようにする。施肥は、窒素過多にならないよう注意する。
- (2) 台風等の風雨による傷や泥のはね上げにより発病が助長される。また、害虫の食害痕から細菌が侵入して発病することが多い。

1 5 トマト黄化葉巻病とタバココナジラミ類

トマト黄化葉巻ウイルス(TYLCV: Tomato Yellow Leaf Curl Virus)の感染により引き起こされる病気であり、タバココナジラミ類によって媒介される。平成17年12月に府南部の抑制栽培トマトで発生が確認されて以降、最近では、平成20年1月に発生を確認しており、今後とも注意が必要である。

トマト黄化葉巻病の発生・拡大を防ぐためには、罹病株の抜き取りとタバココナジラミ類の防除を行い、「トマト黄化葉巻ウイルスの伝染環を絶つ」ことが重要である。

【抑制栽培】

- (1) 先端部の葉が内側に巻いているもの、葉縁が黄化しているもの、株が萎縮しているものは、目印を付けるとともに怪しいと判断したら関係機関に連絡する。
- (2) 黄色粘着版などを利用し、コナジラミの寄生状況に注意する。
- (3) 野良生えトマトも重要な伝染源となるので、自生したトマトは除去する。

1 6 タバココナジラミ類

タバココナジラミ類は世界中に分布し、多くのバイオタイプ(形態的な区別が難しく、遺伝的、生物学的に異なる系統)が存在する。本州では在来系統(バイオタイプJpL)、バイオタイプB(従来シルバーリーフコナジラミ)、バイオタイプQが確認されている。バイオタイプQは平成17年に国内で確認された侵入害虫で、発生確認後各地で発見されるようになり、平成20年2月には37都府県に分布を拡大している。

農業総合研究所と病虫害防除所が行ったコナジラミ類分布調査では、タバココナジラミ類は京都府全域に発生し、特に夏以降発生が増加することがわかった。平成17年にはバイオタイプQが府内で初めて山城で確認され、平成19年には福知山市まで発生地域が拡大した(平成19年11月6日付け防除所ニュース第14号参照)。また、平成20年6月の調査では、京都市以南で発生を確認している。

本種は薬剤感受性が低く難防除害虫といわれていることから、以下の3点を防除対策の基本事項として、防虫ネットや黄色粘着ロール及び農薬等を組み合わせた

- 「総合的害虫管理」が有効となる。
- ・施設内にコナジラミを「入れない」。
 - (1) 開口部の防虫ネット被覆。
 - (2) 黄色粘着ロールの展張。
 - (3) 近紫外線カットフィルムの使用。
 - ・施設内・施設周辺のコナジラミを「増やさない」。
 - (1) 発生初期の防除の徹底。
 - (2) 薬剤のローテーション防除の実施。
 - (3) 天敵や微生物農薬の有効利用。
 - ・施設内からコナジラミを施設外に「出さない」。
 - (1) 夏場の蒸込み処理。

17 オオタバコガ、タバコガ、シロイチモジヨトウ

発生すると大きな被害になるので注意する。

オオタバコガ及びタバコガは果実に食入すると、またシロイチモジヨトウは齢が進むと、薬剤の効力が低下するので、早期発見に努め、食入前及び若齢期の防除に留意する。

18 ワタヘリクロノメイガ〔ウリノメイガ〕(キュウリ)

果実を食害するため、密度が低くても大きな被害になるので発生に注意する。

19 ハイマダラノメイガ〔ダイコンシンクイムシ〕(アブラナ科)

生育初期に加害されると、大きな被害になるので注意する。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 苗床や定植直後によく観察し、発生を認めたら直ちに防除する。
- (2) は種直後から寒冷しゃ等で被覆を行い、産卵を防ぐ。

病虫害防除については、病虫害防除所・最寄りの農業改良普及センター又は農協にご相談ください。

詳しい農薬情報は、農林水産省ホームページの「農薬コナ」をご覧ください。

ホームページアドレス <http://www.maff.go.jp/nouyaku/>

農業改良普及センター 電話番号一覧

・京都乙訓	農業改良普及センター	075 - 315 - 2906
・山城北	農業改良普及センター	0774 - 62 - 8686
・山城南	農業改良普及センター	0774 - 72 - 0237
・南丹	農業改良普及センター	0771 - 62 - 0665
・中丹東	農業改良普及センター	0773 - 42 - 2255
・中丹西	農業改良普及センター	0773 - 22 - 4901
・丹後	農業改良普及センター	0772 - 62 - 4308

農作物病害虫情報サービス

- ・テレホンサービス
0771 - 23 - 6442
- ・ホームページアドレス
<http://www.pref.kyoto.jp/byogai/>

京都府病害虫防除所

〒621-0806 京都府亀岡市余部町和久成9
TEL 0771-23-9512
FAX 0771-23-6539